

あんげろす

相対化の必要

心を尽し、精神を尽して主なる神を愛することが聖書には記され、信ずる者に求められる。それは信仰の内実に関わる事柄として、基本的な在り方を指し示したもの。さて、私はこれまで「キリスト教」と「社会福祉」の関係を問う作業を行なって、この「心を尽し」て進む道に対し、社会福祉は対象者の多様なニーズに「合わせ」、「寄り添う」道であると理解している。前者は主体の態度規範、後者は行為規範と区別してみるなら、一応の整理は可能である。だが、ここにひとつ問題がある。つまり、実際に心を尽す態度を貫くことが、相対的に多様なニーズに応え得ることになるか、どうか。多様なニーズに応えることを軸にして考えると、心を尽す態度規範は相対化されることが起る。多少まぎらわしい言い方だが、信仰は相対化されず、態度、そして行為規範は徹底して相対化することが必要だという問題である。つまり「信仰」は相対化しなくとも、「行ない」はどこまでも相対化、多様化する必要が生ずる。聖書は主に仕えるように、他者に仕えることを勧める。他者に仕えることは、自らを相対化することによってはじめて可能となるのだが。

遠藤 興一

